

シルビアシジミはごく普通種であるヤマトシジミときわめて近い仲間で、素人目にはまず両種の区別ができない、現在、絶滅危惧種Ⅰ類（日本全体での絶滅が危惧される）に選定されているシジミチョウです。近隣では加古川市近郊に比較的広く分布していて、きわめて貴重な生息地と



71108 加古川志方町 シルビアシジミ♀



May 6, 2009 加古川市志方町

なっています。幼虫はミヤコグサという特殊だけど割合広く自生している植物を食べて育ちますが、その食草が田畑の周辺にあって、定期的な草刈などで一気に刈り取られるという過酷な環境を生き抜いているチョウです。大阪や兵庫県では

シロツメグサ（クローバー）を食べている地域もあるようですが、加古川周辺ではミヤコグサ以外は食草となっていないと思われます。私が野外で捕獲した早にミヤコグサへの産卵をさせていたとき、近くのウマゴヤシにも産卵したことがあって、図鑑にもウマゴヤシも食草になるとの記載があるのですが、この卵は雨風に打たれていつのまにか葉っぱから外れ、このウマゴヤシを食って幼虫が育った形跡はみられませんでした。

プランターに植栽したミヤコグサを使って野外で捕獲した生きたメスに産卵させ、そのまま自然に近い状態で**成育**させてその経過を観察すると、卵から生まれたばかりの幼虫は葉っぱをなめとるように食べるためにその食痕がくっきりと目立ち、野外で幼虫を探すタイミングとしてはこの初令の時期が一番見つけやすいことが分かります。**成育**するにつれて幼虫はミヤコグサの緑にまぎれて発見はきわめて困難となります。ですが、

May 8, 2008 加古川市志方町  
シルビアシジミ♀

July 4, 2008 茎を食う幼虫

終令になると好んで花や実を食べるために茎の先端部に長居するようになり、とたんにその存在が目立ちます。花や実を食い尽くしたあと、近くの柔らかい花や葉っぱへと移動することなく、花や実がついていた茎を先端からかじってゆく様子も観察できましたが、野外で少ない食草をせいっぱい有効に活用する、まさにむだのない好ましい習性で、ギフチョウやキアゲハの幼虫でも同じ挙動を観察しています。

シルビアシジミは幼虫で越冬して4月後半に第1化があらわれ、11月後半まで4-5回の発生を繰り返します。第5化個体が10月上旬から11月上旬に発生し、最後に生まれた幼虫がミヤコグサを食したあと越冬に入るものと思われますが、終令にまで育ってからの実態は不明です。考えられる自然外敵として、アリ、クモ、ハチ、ムカデ、トカゲなど、また人的な草刈や野焼きなど多くの危険を回避して生き延びた個体だけが来春チョウとなれるわけで、一体どのような場所で冬を越すのか、分からない研究課題はたくさん残っています。

全国的には、ミヤコグサが自生する河川土手などが護岸工事などの人工的開発によって激減し、生息地がどんどん失われる運命にあるチョウで、私は松波町の花畑隅にミヤコグサを繁殖させて自然にチョウがやってくることを期待しています。